





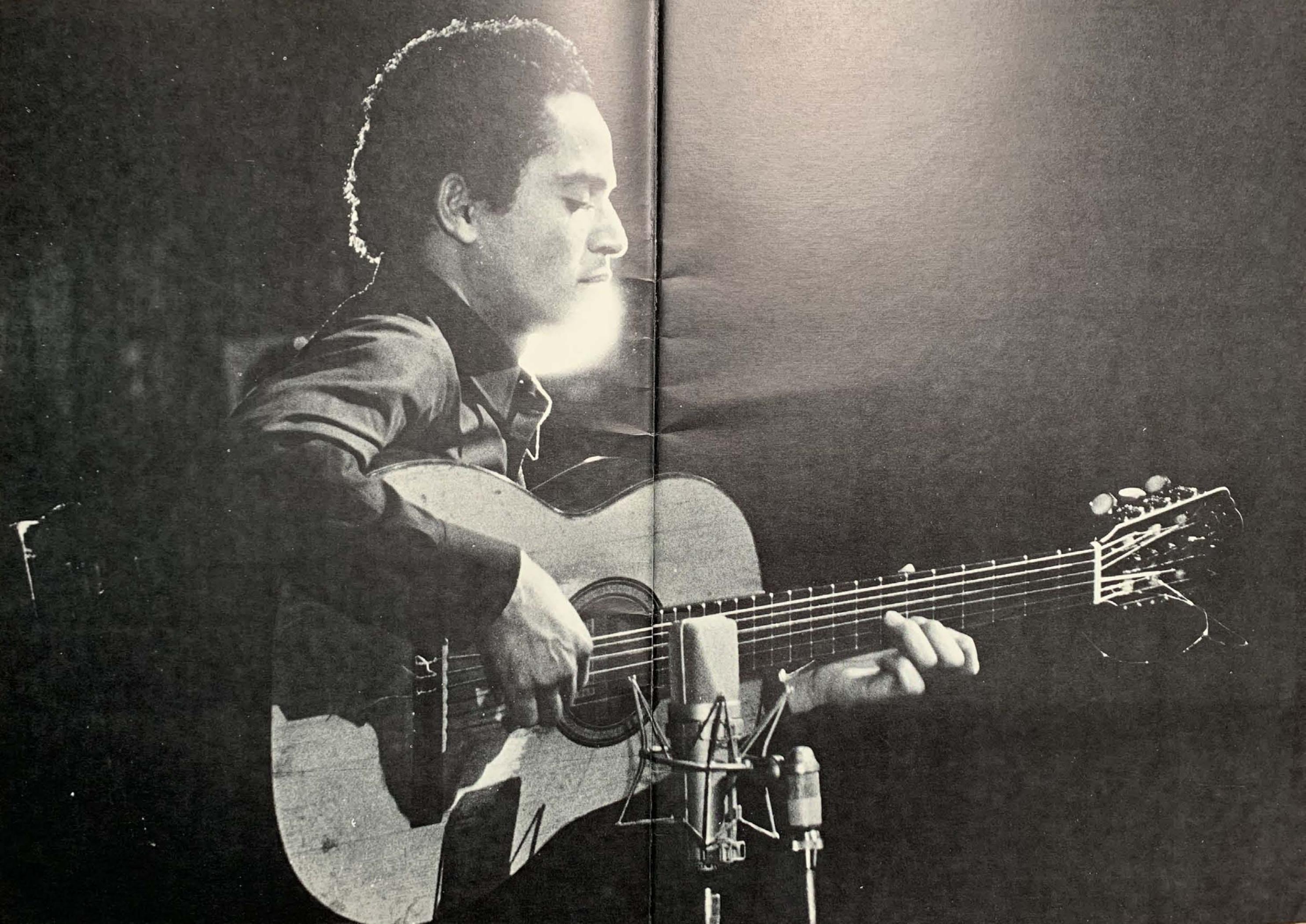
★バーデン・パウエル公演スケジュール

- 4月7日(水) 来日
9日(金) 大阪 フェスティバルホール pm 6:30
12日(月) 大阪 毎日ホール pm 6:30
19日(月) 東京 サンケイホール pm 6:30
主催/サンケイスポーツ・ニッポン放送
■クラブ・ゴールデンゲイト
20日(火) 東京 サンケイホール pm 6:30
主催/サンケイスポーツ・ニッポン放送
■クラブ・ゴールデンゲイト
21日(水) 東京 渋谷公会堂 pm 7:00
■クラブ・ゴールデン月世界
22日(木) 東京 文京公会堂 pm 6:30
■クラブ・ゴールデン月世界



Baden Powell

PHOTO: A. MIYASHITA
DESIGN: T. NAKAJIMA
PRINTERS: MORIOKA PRINTING



バーデン・パウエル ないしょばなし

油井正一

70年9月末、はじめてバーデン・パウエルの素顔を、記者会見でみた時は「アッ！」と驚いたナ。

全く似ているのである。そっくりなのである。誰に？って……ファドの女王アマリア・ロドリゲスにさ。

その年の夏、万博ジャズ・フェスティバルという、荷の重い仕事をひきうけて、楽屋をウロチョロしている時、渡辺美佐が黒ずくめの服を着て、黒メガネをかけた小柄なおバサンとつれだつてきて、

「アマリア・ロドリゲスさんです」と紹介してくれたのである。まるで嘘ではないかと思え思った。アマリア・ロドリゲスは、ほくが最も尊敬している大歌手であり、大歌手というものは、もっと堂々たるおバハンであるはずだ……と思ひこんでいたためである。

その時50センチと離れぬところで挨拶をかわしたアマリアの薄い唇と、角ばった耳からアゴにかけての模様、バーデン・パウエルとウリふたつであったとは……とは？

ロドリゲスのステージには、その週の終りに虎の門ホールで接する機会があった。再び驚いたことには、あの小柄にみえたアマリアがまるで別人のごとく偉大で、エレガントなレディにかわっていたことであつた。

……といった話を、ついこのあいだ日独ジャズ・ワーク・ショップ演出のため来た評論家のペーレントに話したわけである。

「オヤそうかい？」とペーレントはいった。そこで二人は、アマリア・ロドリゲスとバーデン・パウエルを結びつける因果関係について語りあつた。

アマリアに黒人の血が流れているかどうかは全くわからないが、色はやや有色系ともみえる。ポルトガル人であることはハッキリしている。一方バーデンには、ポルトガルの血とニグロ（多分ヨルバ族）の血と、ブラジルのインディオの血が流れている。このポルトガルの血という一点で、結びつけようと思えば結びつかぬことはない。

それにポルトガルのファドという民謡は、スペインのフラメンコと同様、黒人音楽の影響を受けて発生したもので、下層階級から起つた点でも、アメリカのブルースにとってもよく似ているのである。

といった話から、話題はバーデン・パウエルに移っていった。

実は1966年、全く無名に近かつたバーデンを探し出して、世界の檜舞台にあげたのが、他ならぬペーレント氏だったからである。

MPSの「ボサノバ・ギターの鬼才／バーデン・パウエル」(YS 2115)の裏解説にも、ペーレントが、彼をみつけたしたいきさつが書かれているが、ナマできく話は、さらに面白かつた。

—1966年、ペーレントは2度目のブラジル旅行で、必死になってバーデンを探した。ドイツに送られてきたテープが、とても素晴らしいものだったからである。誰にきいても所在はわからなかつた。ところがサンパウロにペーレントの高校時代のガール・フレンドがおり、そこに18才の娘がいた。ドイツからブラジルに帰化して、ブラジル人になったことを、とても誇りに思っていた。その娘が「バーデンだったら、どこに行ってるか知ってる」という。ペーレントはサンパウロの人通りもない、薄暗い一角につれてゆかれ、その中でも特に暗いバアの片隅で、ギターを足下におき、夫人テレサ（恋人かと思ったら当時の夫人であつた）を右手に抱いて、酒をのんでいるバーデンにめぐりあえたのであつた。「君のレコードをつくりたいのだ」というと、バーデンは「自分は今パークレイと契約していて、来年の3月1日に切れる。その後で発売してくれるなら」という。

堅くそれを約束して、2週間後リオのスタジオでとることにして別れた。

ブラジル人は時間におくれることを何とも思わないのに、約束の日の30分前にバーデンはスタジオに来て、ペーレントを待っていた。

ペーレントは約束通り、翌年4月1日にMPSからそれを発売したところが、パークレイから激しく抗議され、遂に訴訟さきぎにまで発展してしまつた。つまり3月の契約破棄をバーデンが申し入れ忘れたため、自動延長になってしまつたのである。

結局、MPS盤は今日も廃盤にならず、同じレコードがフィリップスからも出て、何となくカタがついたが、天才肌のバーデンには浮世の雑事が不向きなのである。その点この天才が、今回日本の東京にある現代ブラジル協会と正式に契約をむすんだことを、ペーレントは大いに祝福していた。

(ジャズ評論家)





アキーノという名の間味が いっぱいセニョール

大島 守

バーデン・パウエルは1970年度の「ニュー・ポート・ジャズ・フェスティバル・イン・ジャパン」に参加するため昨年の9月26日の夜はじめて東京国際空港に姿を見せた。10月3日の「ミッド・ナイト・ジャム・セッション」以降多くのコンサートに出演し、フジTVの「ミュージック・フェア」「ナイト・ショー」NHK-TVの「世界の音楽」などでも広く紹介され、日本パークレーにもレコーディングを残して11月9日の夜、次の出演先ドイツに向けて旅立っていった。その間に接した彼のヒューマンな生活の一瞬、対話をまぜて述べて見よう。

●気に入ってくれた黒いスポーツ・シャツ
とても気むつかしい人だということをもっと聞かされてきたので個人的な接触はしばらく遠慮していたがチャンスは間もなくやってきた。9月30日の午後ヒルトン・ホテルでの記者会見が終ったあとバーデンの車に乗りこんで、いろいろな質問を浴せたところ、その内容に興味を持ってきて以後彼の部屋にはフリー・バスということになった。翌日マネージャーの小野さんの助言でバーデンが欲しがっていた黒いスポーツ・シャツなどをもって単身で恐る恐る彼の部屋を訪れると大層喜んで迎えてくれた。

バーデン「すてきなシャツだ。僕はこういうわけか黒いシャツが好きだね。明日からのステージでは断然これを着て演奏することに決めた」

Mサイズ首回り38センチの私の勤は当って、彼は瘦身の意外に胸毛の多い肌と直接着こんで相好をくずしていた。

●祖父は純金の指揮棒を使っていた
連日私のバーデン詣でが続き公演先までギターを運んだり、ほかのメンバーを引率したりしている内にその日の批評を求めてくるようになった。10月7日の夜バーデンははじめて「バイアの想い出」を歌ったが、このときはとても心配そうだった。

バーデン「私の歌はどうだった？こんなディザフィナードな歌でもみんな満足してくれたらうか？」

彼はちょっと調子が悪いときはとても自己批判の意識が強く、そういうときは卒直な意見を述べないと、かえって不信感をまねきかねないのである。

バーデンのギターはDel Vecchioと練習用のDigiorgioというサンパウロのイタリア系ブラジル人が作ったものを使っている。決して名器ではないが、ひと度彼の手にかかると

さまじい迫力と珠玉のような美しいトーンが生まれてしまう。

バーデン「子供のとき叔母のギターを盗んだ、という話はこういうわけだ。あるとき叔母が何かのコンクールで賞品にギターをもらってきたとき、無性に欲しくなってベッドの下にかくしてしまっただけ。しかしその翌年にはジャイミ・フローレンセから正式にギターのレッスンを受けるようになった」

音楽家だった父と祖父についてはこう語ってくれた。

バーデン「父は無声映画の伴奏のオーケストラでヴァイオリンを弾いていたことがある。そのとき隣で有名なピシギーニャがクラリネットを吹いていた。父はギターやトロンボーン、ベースなども祖父から習っていたが、学校で歴史と地理の先生もしていた。本名はリーロ・ジ・アキーノだけとセニョール・チッキとよばれていた。祖父の名はヴィセンテ・トマス・ジ・アキーノといい奴隷解放後に黒人オーケストラを指揮していた。その指揮棒は純金だったそうだ。しかし肌の色は（黒い灰皿を指して）こんなに真黒だった」

サンバのことについては
バーデン「20才までエスコラ・ジ・サンバにいたのでカーニバルのときはチーム（最高のグループ、エスタソン・プリメイラ）に加って踊ったんだよ」

●深夜の病院を脱走して

持病の胆石が再発したとき私は彼が指定した薬を買うためあちこち探し求めたがやがと新宿で見つけ出した。しかし遂に入院、2日もたつと「脱走したい気持だから迎えにこい」という。その夜彼の病室の下でブラジル式の人を呼ぶ「ブシュー」という音を立てると窓があいて「今降りていくぞ」というサインを出した。あちこち社会探訪をしたあと知り合いの料理屋で筆が気に入り、ハワイアン・ギターのようなチューニングにしてかき鳴らしはじめた。すこいテクニックの奇妙な演奏は前代未聞のショーであった。

バーデン「どこかに自転車を貸すところはないかね。ふしぎに思うかも知れないが、実は自転車競走の選手だったんだよ。ブラジルNo.1を狙っていたんだがねえ」

フランクフルト行きがもうすぐ出るというときまで羽田のターミナルのバーで私をつかまえて作曲論をぶっていた。そのとき私は強引に彼をゲートまで連れていったが案の定関係者ははらはらしてバーデンを探していた。

(ジャズ評論家)

進んでいる 中南米の音楽

菅原 洋一

アルゼンチン・タンゴを歌い出してこの世界にはいった私です。絶対一度はアルゼンチンそしてブラジルの音楽に直接触れてみたいというのが夢でもあり、念願でもありました。そんな願いが二月に訪れたのです。前々から待望のプライベートルームが出来、小沢惇社長（私が所属の小沢音楽事務所代表）とともに南米を訪問できたのです。

一ことでいって、やはり中南米は音楽の宝庫でした。たとえば18才の若い作曲家が、想像もできないような、抜群のテクニックをもっており、難解なコード進行のモダンな曲を作ったり、たびたび行なわれるコンクールには、乾いた伝統的なリズムに、近代的な味つけの作品が続々出てきたり。さすが宝庫の名には負けないものばかり。

中でも一番感激したのは、人々がちゃんと自分の音楽をもっていること。「彼らにとって音楽は空気と同じだ」といった人がいましたが全くその通り。私はむしろご飯と同じつまり絶対の必需品という印象をうけました。私がブラジルにいてるときこんなことがありました。夜中の一時か二時ごろ、何かのコンサートが終わって道は車の洪水でした。それが全く動かないのです。ドンドコドコとヘンな、それでいてリズムミク的な音が聞こえてきます。バスがエンコしちゃっているのですが、バスのお客さん、運転手までが、イライラするどころか、身近にある窓や、床を打ちながらドラムの饗宴です。おどろいたことに運ちゃんまでがハンドルを手で打って、彼らのリズムに参加しているんです。さらにもっとびっくりしたのは「ガン」であるはずの、バスのそんな騒ぎに、待たされている他の自動車の人たちが何一つ文句いわず、彼らの騒ぎをニヤニヤ見ていること。のんびりしている国民性とはいえず、驚きの次に私はたいへんな羨望を抱いたものです。

そんなお国からジャズ・ギタリストのバーデン・パウエルさんが再びおいでになりました。それほど音楽性豊かな世界的になるには、逆から見れば、かなりの実力の持ち主です。彼は譜面をまず体全体で受けとめています。自分の耳でつかまえたものを、聞き側の耳に、大いなる人間性を伴って伝えていきます。

パウエルさんの「五つ木の子守唄」を聞いたことがあります。乾いた単音、その中には半音上がっていたり、下がるはずなのに下がらなかつたり。ちょっと聞くと「オヤツ」と思いますが、それはパウエルさんの自分なりの解釈なのです。パウエルさんの「五つ木一」なのです。熱っぽいお国から、日本よりも10年先に進んだと思える音楽をもってきてくれたパウエルさん、きつとすばらしいステージを見、聞かせてくれるでしょう。



パウエルとエンカ

ソニア・ローザ

バーデン・パウエルさんとは5年前、私がまだブラジルにいたとき、コンサートで会いました。よく知っていますけど、とってもむずかしい性格ね。だって考えていることが10年先のことなんですよ。だから私は二番目に彼が好き。一番目？ それはジョアン・ジルベルト。でもボサノバの勉強に関してはお二人とも、まず第一の先生。

私のことで恐縮ですけど、私は一昨年10月音楽の勉強のためブラジルから日本にきました。東京から「青いベッド」「タオタオとレオレオ」の2枚のレコードも出しています。私はむしろボサノバが好きで、そっちの方の勉強だとして続けているけど、シンイチ・モリさんやケイコ・フジさんのエンカも大好き。ブラジルの音楽、サンバが中心で乾いている感じ。日本のエンカぬれてるわ、もし日本とブラジルの音楽の接点なら、そうバイオンのリズムから……

聞くところによると、パウエルは、日本の歌謡曲をレコードに入れたんですって？ パウエル・ファンにはいろいろ不満もあるかもしれないけど、私には「ワンドフル」だわ、彼のギターテクニックってとってもすばらしいでしょ。それを私の好きなエンカにぶつけてくれたのです。

彼の演奏は、ハッキリいってムード・ミュージックじゃないわ。ギターの一つ一つの音の中に、ブラジルの匂いが混り、その中で育ったパウエルの音楽性、人間性がいっぱいもりこんでいるの。彼ってとっても「むずかしい」人だから、のった音とらのない音がある。でも、のらない音だからつまらない、なんていえない。のらなきやのらなだけの彼らしさがあるのです。

それはボサノバだって同じ。ブラジルの音楽って「ここからここまで」というクグリはない。あらゆる音楽への可能性を、自分なりにとんとん研究し、音にしていくわけです。パウエルは「むずかしい」人だけど、それだけ、自分の音楽に対して妥協がないわ。いつもニコニコして、相手の顔色見ながらの音楽じゃありません。エンカもきつと、パウエル流のエンカでしょうね。

私は、私の国からそんなすばらしいミュージシャンが生まれたことを誇りに思うと同時に、私も日本の音楽を学ぶ反面、ブラジルの音楽をもっと広い人々に知ってもらいたいと思います。

お酒の大好きな 魔法使いの パウエルさん

金井 克子

ほんの短かいおつき合いで知った目のくらむようなパウエルさんの華麗な世界。それは今思い出してみても魔法使いのひとときとしかいようがありません。

お酒をそばから離さない魔法使いさん。「ミュージック・フェア」（フジTV）の中でパウエルさんのギター伴奏だけで「黒いオルフェ」を唄うというので、おけいこにホテルをお訪ねしたある日……殺風景なお部屋には、ただギターだけが奥様のようによしよそっていました。

次の瞬間そこがただのお部屋でないことを知りました。マッチ箱であれ、くずかごであれ、音の出るものなら何でもたちどころに楽しいリズムを刻む楽器に変えてしまうまるで魔法使いのようです。

湧きでてつきることのないギターの音色に我を忘れてただただうっとりするばかりでした。

明日への不安も、心にわだかまったものも、もつれた糸がほぐれるように、そこに居合わせた誰もがパウエルさんの喜びに和し、パウエルさんの淋しさにメランコリックになるのです。

際限なくグラスを傾け、パウエルさんは皆を魅惑してしまふのです。

タクシーを拾うのも忘れて、ひんやりした夜風をほほに受けて歩きながら……トコロテ、オナカスイタワネ……と皆で我にかえったことでした。その後、何度かお会いしましたが、あるときはブラジルを語り、ポルトガルの移民の悲しさを話し、そこに起った音楽を話さときの遠くを見るような憂い顔の美しさに、思わず魅了されてしまいました。

昨年ブラジルに行ったとき（ブラジル音楽祭）そこで国家的なパウエルさんの存在を知りました。

今やパウエルさんの芸術は、ブラジルにとどまらず全世界の財産なのでしょう。

私が明日ブラジルに立ち、パウエルさんは日本という奇妙なお別れのひととき、踊りにいきました。あゝ！残念、そこでもパウエルさんは、私の踊りの先生でした。

話はさかのぼるが、去年の10月5日、サンケイホール バーデン・パウエルコンサートの第二ベルが鳴り、何とも言えない緊張感があたりを包む。そのとき、録音室に陣どる我々録音スタッフはバーデン初の全曲ライブレコーディングという大きな仕事に直面していた。「幻のポッサギター」と称されるバーデン初のお目見えだ。

ギターを片手に持ち、拍手に迎えられ、席に着く。まず、ショビンの名作「イバネマの娘」続いて、「悲しみのサンバ」「トリステザ」「コンソラソン」「ピリンパウ」「アバエテの物語」と“お得意”が休みなく続く。驚異という表現でも足りないくらいのリズム感、「マルシェ」では圧倒的なテクニックを駆使する。そして「別れの歌」における絶妙な表現力……。

あの小さなからだ、細い指から信じられない程のエネルギーがモニタースピーカーを通して我々にスパークしていた。そこで繰り広げられた世界は「ポッサ・ギター」というカテゴリーにとどまらず、何か“オールマイテ

イ”という感さえ強く抱かせた。この時の録音は“生ギター”がメインになっているため、その微妙なトーンの変化等を如何にとらえるかとミキサーの耳は真剣だ。同室された評論家の大島守さんも思わず息を殺して聞き入る。

エキサイティングした聴衆の絶大な拍手とともに、コンサートが終る。深く心に残る感動。意義ある一夜だった。

一方、舞台を離れたバーデンは、というところこんな具合だった。

去年の9月末日、数回、ホテルでミーティングをしたとき、まだ正午を少し過ぎたばかりだが、彼の手の中には常にウイスキーグラスが置かれてあった。そして時には足もとが確かでない時さえあった。彼は確かに“酒好き”である。本当によく飲む。話が進む中で突然電話のベルが鳴る。どうやら地球の裏側、ブラジルのダレカに国際電話をかけたらしい。10分20分……と続く。さすがに我々たちがスケールが大きい。我々の何ヵ月分もの給料を電話代にかけるのだから。

そして、我々が別れを告げ部屋を出る時は、

たどえ酔っているように必ず出口まで見送り、ひどなつまみ食い微笑とともに手を差し出す話題も多い人だ。

さて、コンサートの翌日、収録されたテープをプレイバックした。昨夜あの興奮が生々しく伝わっている。演奏や収録状況をチェックして、最終的な収録曲、曲順を決定、更に編集して後日、バーデン・パウエル自身の立合いでプレイバックする。場所はキングレコード第一スタジオのモニタールーム。真剣に聞き入るバーデン。そしてレコードでの日前、最後の「別れの歌」が終り、ニッコリと「バーデン・スマイル」を浮かべてOKのサインを出したとき、我々スタッフも言いようのない満足感に満ちていた。

この瞬間にバーデン・パウエル初の全曲ライブ・レコーディングLPが誕生し「バーデン・パウエル・イン・ジャパン」「パークレー・レーベル」のタイトルで発売された。

ひき続き、我々はもう一つのアタックを試みた。あの「黒いオルフェ」がどうしたわけがバーデンの演奏では、ギターとベースのデ

ュエットで一度だけしか録音されていなかった。フルートを交えたスタイルで録音しようと思った。しかも日本のトップメンバーとの協演で……。

彼は非常に興味を示し、快諾してくれた。

日本側のサイドメンは、フルート — 横田年昭、ベース — 寺川正興、ドラムス — チト河内だ。スタジオ録音ならではの余裕の中で繰り広げられる「バーデン」の世界。テストのたびに異なるフレージングでプレイするイントロ。流れるようなオブリガード。ベース、ドラムスによってフルートがからむ。異色の顔合せによるこの楽しい録音も成功だった。

これらのショッキングなまでの印象を残して、帰ってしまったバーデンが再び日本にやって来たのだ。あのリズム感、テクニック、フィーリングを思い出すたびに待ち遠しくてゾクゾクする。とくにポッサ系ギターを演奏するとき、正しくNo.1の實録で追ってくるあの感じ……。今夜は聴衆のひとりとして“ナマ”のバーデン・パウエルを心から楽しみたい。

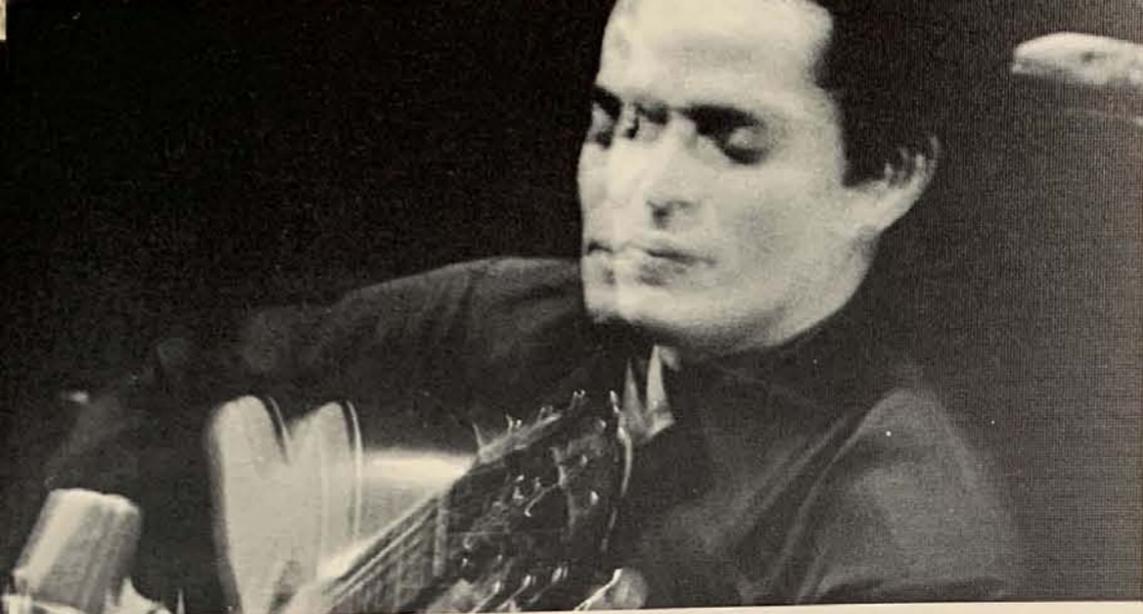
「バーデン・パウエル・イン・ジャパン」あれこれ

パークレー・レコード室長 長島卓二



Baden Powell





“バーデンと日本の心”

誰れでも知っていることなのだが、その国のそのアーティストが他国の音楽を唄い演奏することはたやすい。が、そこには“共通する音楽の心”はない。バーデン・パウエルもその一人だと思った。

2月にキャニオン・レコードの録音にやってきたバーデンと再会したときもその不安は残っていた。昨年の秋、彼が日本公演のために初めて来日したが公演のあと話をする機会に恵まれた。

人間を人間らしくみつめる大きな黒い瞳に強い印象を与えずにおかないこの人に僕は胸をしめつけられた。ジョニー・ウォーカー（黒だった）を飲みながら数時間話し会った。話しているというよりは“人間の心”の感情を静かに語りかけているようだった。特に僕は“日本の詩情”に興味をもっている彼のハートに胸を打った。外国人の社交辞令は決まって“日本は好きだ”ときまり文句を言う。何回も何十人の音楽家はそう言って日本にやってきたし、帰っていった。

しかし彼の言葉の「日本の詩情」と「日本が好き」という言葉はそれぞれ共通した意味を持っていることを発見した。それは“土着的”な“心の交流”を感じさせる内容の発見であった。

聞いてみると彼の祖父は、人間を人間らしくあつかわれなかった“奴隷”であったという。言うまでもなく家庭は貧しく、父は身分も低く、彼は暗い青春時代をすごしたのだった。そんな暗い少年時代の心をなくさめさせてくれたのは音楽であり、ギターであり、お祭りであったと言う。孤独のギタリストはここから生れたのでしょうか。ブラジル生れの土着的なフィリングはギターの奏でる調べに乗ると彼の呼びと発言があるのを感じます。僕は“日本の詩情”の意味で彼の心のとらえ方に共通性を見出すことに時間はかからなかった。それはレコーディングの時に何度も何度も日本の流行歌の作詩の内容、作曲の曲調、ポイントにもすこく神経質であった。“知床旅情”“望郷”のもつ“日本の心”をスタッフの連中が通訳を介して何度もくりかえして説明する。彼は例によって大きな眼をじっと開いて相手の気持を理解しようとする。ときどき閉じる眼には涙さえさらめくしゅん間もあった。それは自分自身に納得できない曲調とか、詩の内容に対して努力しようとする態度がそうさせているのだった。顔をおさえ、頭をかきむしる、芸術家が悩む、姿ではなく、だだっ子が“もうよしてくれよ！。俺は眠いんだ！”といったような仕ぐさがスタジオの中でつづく。し

かし彼は自分の納得できた曲に対して自分のオリジナルを生かした編曲を考えているのだ。ピアノのキーを合わせたり、ギターを無造作に持ち、かきならすのかと思ったら、そうじゃなく、ぼいっと床の上に置いて、眼を閉じる。いらいらする録音スタッフ時間は深夜の3時だ。もう4時間もこんな状態が続いている。人間と人間の静かな対決とはこんなものだろうか……。彼の生い立ちについてまだ本当のことをよく知らない人が多い。

僕もそのうちの一人だった。彼の音楽の才能は過去の数枚のレコードを聞けばおわりの通り誰でも認めるところです。しかし、今度の彼は“日本の心”をギターで奏でるために斗っている真の姿を目の前に見て“彼から音楽をとったら死んでしまうに違いない”と直感した。

彼のギターは“祖父のこと、父（1962年に死亡）のこと、死んだ（交通事故）仲間の歌手のこと、彼をとりまくさまざまな“わびしさ”淋しさ、人生のやるせない心の詩をギターで奏でる。彼自身も云っている。

『ギターと音楽と詩がなくなったらいつでも死んでしまうよ……』と。

だから1曲録音し終えるのに24時間もかかったこともあったし、5分で終える場合もあった。鬼才、異人、幻、といわれる彼に僕は“孤独のギタリスト”とつけたい。録音が終わったのは彼が来日してから一週間目の帰国する午前中だった。フジテレビの“ナイトショー”の生番組に出演するためのリハーサルでは伊丹十三氏（ホスト）とのからみがあった。伊丹氏は彼に対して神経を細かく気をくばっていた。リハーサルしている時の不安と本番の時の彼のギターをかかえたときの期待はもの見事に消し飛んでいた。伊丹氏の態度はさすが芸術家へのマナーを心得た名ホストぶりだったことを彼の口から聞いたとき、彼の“日本の心”は本物だったのかとわかった羽田空港に送りにいった時、彼は僕にしみじみと語った。ロビーで彼は例のジョニー・ウォーカーを手にしながら「自分でもよく解らない、自分はブラジルに帰るのか、行くのか、情のある日本を今、離れるのかと思うと涙が出てくる……」大きな眼の瞳から大きな白い涙が光っていた。だが、もう彼はすぐ日本で“日本の心”に会えるのだ。彼のLPも、舞台もききと成功するだろう。

キャニオン・レコード国際部長

高崎一郎



BADEN POWELL DISCOGRAPHY

バーデン・パウエル・デスクグラフィ

- ★イエマンジャの唄..... CANTO DE IEMANJA
- ★イバネマの娘..... GAROTA DE IPANEMA
- ★生きがい
- ★五ツ木の子守唄

- ★バ イ ア..... NA BAIXA DO SAPATEIRO
- ★バイアの想い出..... SALDADES DA BAHIA
- ★バイオンの練習..... LICAO DE BAIÃO
- ★バシアーナ..... BACHIANA
- ★8月の月..... LUAR DE AGOSTO
- ★花 嫁
- ★花のメルヘン
- ★蓮 の 花..... LÔTUS

- ★ボコシェ..... BOCOCHÊ
- ★ボサ・ノバによるインプロビゼーション..... IMPROVISO EM BOSSA NOVA
- ★星影のステラ..... STELLA BY STARLIGHT
- ★抱 擁
- ★望 郷

- ★ペドラの唄..... CANTO DE PEDRA

- ★ドナ・バラティニーニョ..... DONA BARATINHA
- ★トリステザ(悲しみ)..... TRISTEZA
- ★
- ★わが友、ペドロ・サントスへ..... AO MEU AMIGO PEDRO SANTOS

- ★カンドンブレ..... CANDOMBLE
- ★悲しみと孤独..... TRISTEZA E SOLIDAO
- ★悲しみのサンバ..... SAMBA TRISTE

- ★打楽器によるサンバのリズム..... PERCUSSAO E BATUQUE
- ★ソロンガイオ..... SORONGAIO
- ★
- ★リ ン ダ..... LINDA

- ★わらぶきの家..... MINHA PALHOÇA
- ★別れたあとで
- ★別れの曲..... CHANSON DE LADIEU

- ★ダン、ダン、ダン..... DUM...DUM...DUM...
- ★旅 の 歌..... VIAGEM
- ★誰れもない海

- ★SOM DO CARNEVAL

- ★眠れぬ夜..... INSONIA

- ★7才のインベンション..... INVENCAO EM 7c
- ★嘆 き..... LAMENTO

- ★ラールゴ..... LARGO
- ★ラウンド・ミッドナイト..... ROUND MIDNIGHT
- ★ラ バ LOVER
- ★ラビーニャ..... LAPINHA
- ★ラブ・レター..... LOVE LETTERS
- ★ラメント..... LAMENT

- ★ヴェローゾのサンバ..... SAMBA DO VELLOSO
- ★宇宙飛行士..... O ASTRONAVTA

- ★ノクターン..... NOCTURNE NO.13.OPUS 48 NO.1

- ★オサーニャの唄..... CANTO DE OSSANHA
- ★想い出は濃れて..... ELUIDO DE SAUDADE
- ★女の意地

- ★グリーン・アイズ..... AQUELLOS OJOS VERDES
- ★黒いオルフェ..... MANHA DE CARNAVAL
- ★黒 い 光..... LUZ NEGRA

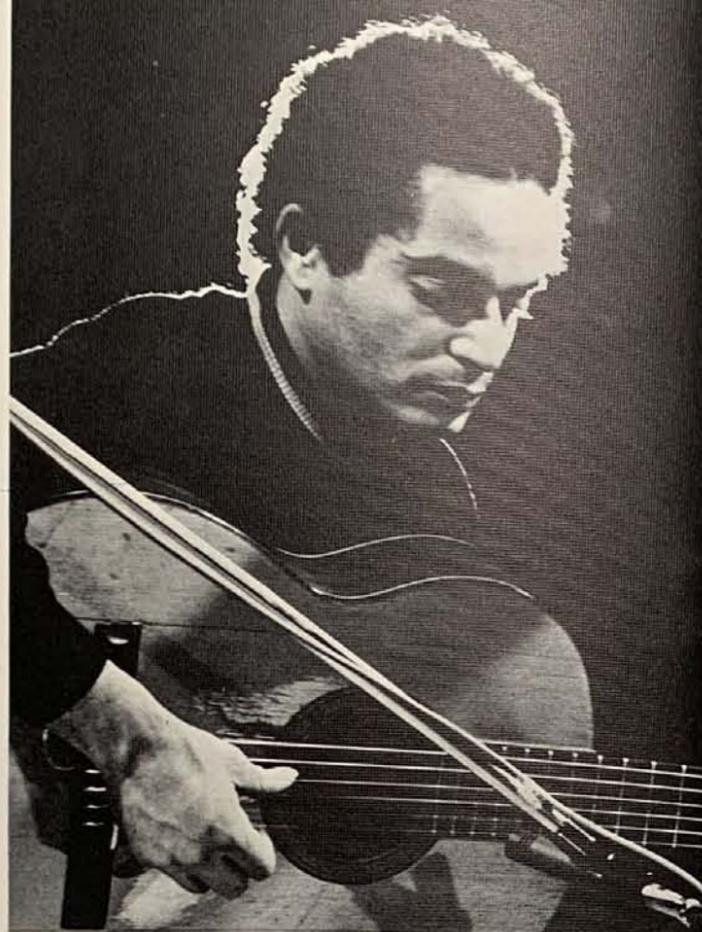
- ★やあ! エルネスト..... ALD ERNESTO

- ★マ ー チ..... MARCHA ESCOCESA
- ★マイ・ファニー・ヴァレンタイン..... MY FUNNY VALENTINE
- ★マ リ ア..... MARIA
- ★マリチーナ..... MARITINA

- ★ブ レ..... DOUBLE

- ★フォルモーザ..... FORMOSA
- ★プレリュード..... PRELUDE
- ★プレリュードのサンバ..... SAMBA EN PRELUDE
- ★FREIINHA PRO POETA
- ★冬の 歌..... CHANSON D'HIVER

- ★コドへの思慕..... UMABRACO NO CODO
- ★コンソレーション..... CONSOLACAO



- ★恋に気もそぞろ..... AMOR SINCOPADO
- ★恋にちがいない..... DEVE SER AMOR
- ★心 変 り..... A VOLTA

- ★エシュの哀愁..... LAMENTO DE EXU
- ★エストレリータ..... ESTRELLITA

- ★できごと
- ★DINDI

- ★アダージェョ..... ADAGIO
- ★アバエテの物語..... A LENDA DO ABAETE
- ★アンド・ローゼス・アンド・ローゼス..... DAS ROSAS
- ★愛でくるんだ言訳
- ★愛のプレリュード..... PRELUDIO AO CORACAO
- ★愛のしぐさ..... DO JEITO QUE A GENTE QUER
- ★愛は深く..... CARINHOSO
- ★秋でもないのに

- ★サ ラ バ..... SARAVA

- ★ギ タ VIOLAO
- ★君はすべて..... ALL THE THINGS YOU ARE
- ★京都慕情

- ★ユリディス..... EURIDICE

- ★メトロノームのためのショーロ..... CHORO PARA METRONOME
- ★め ま い

- ★3つの物語..... TRES HISTORIAS

- ★ジェット機のサンバ..... SAMBA DO AVIAO
- ★ジャンゴの唄..... CANTO DE XANGO
- ★ジュサーラの子守唄..... BERCEUSE A JUSSARA
- ★G線上のアリア..... ARIA
- ★詩人のお話し..... CONVERSA DE POETA
- ★知床旅情
- ★主よ、人の望みの喜びよ..... JESUS BLEIBET MEINE FREUDE

- ★ピリンバウ..... BERIMBAU

- ★盲人、アデラルド..... O CEGO ADERALDO

●イバネマの娘

アントニオ・カルロス・ジョビンとヴィニシウス・ジ・モライスがイバネマに住んでいた美しい娘エロイザに捧げた曲で、ボサ・ノバが世界中に定着するきっかけとなった1963年の作品である。

バーデンは超人的なリズム感、迫力、テクニック、美しい音色、すぐれた音楽性などの特性を発揮してきくものを圧倒させてしまう。

●悲しみのサンバ

バーデンがブラジルの音楽界でやっとな名前が知られるようになった1959年に、先輩ピリー・フランコの作詞を得て作った曲で、いろいろなミュージシャンが演奏している。初期の自作曲を生き生きと演奏して一つの器楽曲として美しくまとめている。途中バッハ風の演奏が入るのも大きな特色といえよう。

●ラメント

バーデンのレパートリーの中で、最も古き良きリオの街を彷彿させる曲である。作曲はアルフレッド・ダ・ロッシヤ・ヴィアーナ・ジュニャ。あまり長いのでピンキニーニャとよばれることが多い。彼は今年72になるまで往年のフルートやテナー・サクスの名手で作曲家としてもバンド・リーダーとしてもブラジル軽音楽史上の生字引のような人である。

●恋にちがいない

1962年に再度ブラジルを訪れたフルートのハービー・マンがリオのミュージシャンと共演したレコードでは2曲のバーデンの演奏に接することができたが、それがこの曲と「コソラン」であった。バーデンは海外へのデビュー曲をすばらしいサンバ・リズムで演奏して彼の演奏を知ったときのよろこびを思い込ませてくれる。

●ラビーニャ

1968年の「2年目毎に開かれるサンバ歌曲祭」で入賞したおなじみの曲でバーデンとバウ・シザール・ビニエロの作品である。この曲は恐らくバーデンがバイーヤに行ったとき首都サルヴァドール市のルア・コレドール・ダ・ラ・ニーニャ(ラビーニャ遊歩街とでも訳すべきだろう)の美しさに魅せられて作曲したものであろう。「俺が死んだらラビーニャに埋めてくれ」という歌いだして、童謡をもとにして作詩したような感じがする。

●主よ、人の望みの喜びよ

バッハのカンタータでB.W.V.147の10番、非常にポピュラーな曲である。ブラジルではヴィニシウス・ジ・モライスが歌詞をつけたランショ・ダス・フロレス」というマルシヤ・ランショとしてよく知られている。

●ピリンバウ

バーデンが作曲家として広く認められるようになった出世作である。1964年に作曲して65年の4月にサンパウロのエセルシールTV局主催のブラジル音楽コンクールに入賞したもので、このときアデマール・サンパウロ州知事が、バーデンに賞金のミニチュアのピリンバウを手渡すとき「これがピリンバウというものでしょうか?恥かしいがはじめてみました」といったそうだ。これはブラジルのレステ(東部)地方に伝わっていた一弦楽器で黒人のカポエイラ競技には欠かせないものである。

●アバエテの物語

バイーヤ州の首都サルヴァドール市から25.6キロ離れたところにアバエテという白い砂に囲まれた小さな湖がある。この古都で生れたヴェテラン作曲家ドリヴァル・カイミは故郷の地名にちなんだカンソンやサンバ歌曲をたくさん作曲しているがこれもその一つである。

ポルトガル風の曲想ではじまりやがてカイミ独自のフリーなテンポを使って物語り風に演奏する。途中「ヴォルガの舟歌」の一節がでてきますが、物語りの舟のシーンかも知れない。

●蓮の花

以前にモダン・ジャズのトランペット奏者ケニー・ダーハムが同じような名前の曲を演奏したレコードが評判になったことがある。バーデンは4ビートで演奏し、シングル・トーンのアドリブもジャズ・ミュージシャンのように演奏する。バーデンの作品。

●イエマンジャー

ブラジルのレステ(東部)地方は黒人の子孫が多いところでアフリカの民俗風習をいろいろな形で伝承している。イエマンジャーはヨルバ地方の出身者の子孫からはじまった海の女神のことでバイーヤ州の首都サルヴァドール市のリオ・ヴェルメーリョのお祭りが最も有名である。バーデンなどブラジルの作曲家は特にイエマンジャーを対象とした作品を多く書いている。

●盲人アデラルド

これはレステ地方から更に北のノルデステ(東北)地方の民謡を借用したか、あるいはその感覚を生かして新しく作曲したバーデンの作品である。ノルデステの中心はペルナンブーコ州のレンシーフェで、ここは有名なフレボアなどのほかマラカトゥーなどの踊りや音楽の中心地である。フレボアがポルトガル音楽の影響を受けているようにこの音楽のポルトガル軽由の中近東、アラブ系の響きが実にフレッシュでマラカトゥーから発したバイオンに似たようなリズムも入る。バーデンは小形のレキント・ギターで特殊な効果をだしている。

●やあ! エルネスト

これもかなり空っぽな曲でやはりバーデンの作品である。途中でエドゥ・ロボの「ウバ・ネギーニョ」のイントロダクションによく似たリズムのパターンがでてくるが、やはりノルデステ地方のリズムにヒントを得たものであろう。これはバーデンがベースのゴンサルヴェスのために作曲したものである。

●マーチ

以前にルイス・ボンファも演奏したことのある曲で、スコットランドのバグパイプを表現したバーデンの編曲になるもの。あらゆるギターのテクニックを駆使してすばらしい名演をくりひろげている。

●トリステザ

アロルド・ロボが作曲したサンバで1967年のカーニバルで大ヒットした曲である。すでにセルジオ・メンデスなどたくさんのグループによって演奏されている。よく演奏さ

●別れの曲

ショパンのエチュード、作品10番の別名である。バーデンはバッハについてショパンが好きなのだが、ショパンのロマンティシズムをよく表現している。

“Happy Night in Golden Getsusekai”



“ゴージャスの全てを、貴方に…”

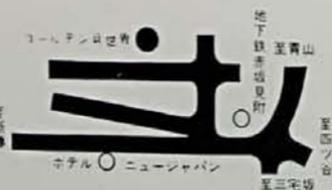
“風薫る季節、皆様に、世界の恋人……”

歌と踊りのスターを次から次へにご紹介致します”

ショー・ガイド
 APR. 21 22 バーデン・パウエル
 MAY. 24 25 26 シルヴィ・バルタン

***** ゴールデン月世界御案内 *****

- ※2F : クラブ ゴールデン月世界
 開店 : 6:00P.M. Show Time : 9:00P.M. 10:30P.M.
 1セット : ¥2,400 (税別) : (カバーチャージ, オードブル, ビール小2or1ドリンク)
 ● 洋食ステーキコース ¥4,000 ● 中華コース ¥3,000
- ※1F : ラウンジ : Open Time. 6:00P.M.
 1セット : ¥1,500 : (カバーチャージ, オードブル, 1ドリンク)
 ● キー・クラブ会員募集中 : 洋酒一本 : (10000円)お買上げの方に会員証を差上げます。
- ※BF : リトル・クラブ ゴールデン・ゲイト
 開店 : 6:00P.M. Show Time : 8:30P.M. 10:00P.M.
 ● ゴールデン・ゲイトタイム : 6:00P.M. - 7:30P.M. 1セット : ¥1,800
 ● 7:30P.M.以後 : 1セット : ¥2,100 : (カバーチャージ, 1ドリンク, オードブル)
 ● 日曜、祭日 : 御同伴、御一人様、1セット ¥1,200 (税別)



CLUB Golden Getsusekai

(ゴールデン月世界地階) LITTLE CLUB Golden Gate

東京都港区赤坂3-10-4 TEL 584-1151-6

BADEN POWELL



ボサ・ノバ・ギターの王様

バーデン・パウエル特選LP盤ご案内!



ボサ・ノバ・ギターの詩人 バーデン
 パウエル

詩人の小さな作品 / ジンジ / コンソラソン
 悲しみと孤独 / 悲しみのサンバ / ユリディス
 君はすべて / 祈り
 ☆バーデン・パウエル(ギター)
 ▶YS-2109 30cmステレオLP ¥1,900



ボサ・ノバ・ギターの鬼才 バーデン
 パウエル

悲しみ / シャンゴの歌 / ラウンド・アバウト・ミッドナイト
 サラヴァ / オッサニーの歌 / 黒いオルフェ / そしてバラが
 インヴェンションEM 7 1/2 / カーニバルの響き 他
 ☆バーデン・パウエル(ギター)
 ▶YS-2115 30cmステレオLP ¥1,900



バーニー・ケッセル、ジム・ホール、バーデン・パウエル
 / ベルリン・フェスティバル・ギター・ワークショップ

レイジー・リヴァー / エルマーズ・ブギ / ケアフル
 ブルースの印象 / ドリンキン・マディ・ウォーター / 君が夢路
 ある晴れた日に / 黒いオルフェ / オルフェのサンバ
 イバネマの娘 / 悲しみのサンバ / ビリンバウ
 ☆バーデン・パウエル・トリオ、ジム・ホール・トリオ 他
 ▶YS-2106 30cmステレオLP ¥1,900

コロムビアレコード

光と色があれば、自由な心によえます。



ボサ・ノウァ・ギターの鬼才!
バーデン・パウエル
来日記念レコード!!



バーデン・パウエル
ライヴ・イン・ジャパン

イバネマの娘/悲しみのサンバ/主よ、人の宿みの
喜びよ/マーチ/コンソサラン/トリステーション
バエテの物語/ピリシパウ/別れの歌

バーデン・パウエルと彼のトリオ
(1970.10.5-6日サンケイホールコンサートより)
■GP-35(ステレオ30cmLP) ¥2,200



ゴールデン・バーデン・パウエル
ダブル・デラックス

イバネマの娘/悲しみのサンバ/フォルモーサ
/ラメント/冬のうた/心象おり/イスマンジ
ヤ/ブレイブ/冬のサンバ/ジュセウの子守
歌/アレイユード/ワカタン/我が友ペドロ
/サントスへ/恋にちがいない/ユリゲイス/
3つの物語/ラールゴ/マニチーナ/他

バーデン・パウエル(g)
■GW-91-2(ステレオ30cmLP 2枚組) ¥3,000



ブラジルの詩/
バーデン・パウエル

ゴデへの思慕/アバエテの物語/旅の歌/
ブレイブ/ギター/永遠/イスマンジャ/
盲人アテウラド/やみ/エルネスト/計11
すべて

バーデン・パウエル(g)
■SR-459(ステレオ30cmLP) ¥2,000

パウエルの最新録音盤近日発売!
孤独のとりこ/バーデン・パウエル
泣きたい時は/孤独のとりこ/雨の仕草/良い若者/猫を追っけた
/ドゥニラ/パトローマ/B
■SR-663(ステレオ30cmLP) ¥2,000

この他多数発売になります。ご期待を!

3 **ac/ac** **バークレーレコード**
《発売元/キングレコード株式会社》



マスカラート・3色 ¥400円 アイブナ・500円 プレスパウダー・3種 ¥600円 アイラッシュ・2種 ¥500円 アイライナー・4色 ¥300円 アイシャドー・6色 ¥300円

ChurChur Makeup オペラ

パンフレットお送りします。ハガキにおとこ(郵便番号)・おなまえ・おとし・おしことを明記の上、東京都新宿区私書箱39号(〒160 31)オペラ化粧品受取係へ

ブラジルが生んだギターの鬼才
バーデン・パウエルのキャニオン専属第1弾!

《最新録音盤絶賛発売中!》

BADEN
POWELL

ゴールデン・ギタリスト
バーデン・パウエル

知床旅情
花嫁

■ギター：バーデン・パウエル



知床旅情/花嫁/誰もいない海/生きがい/京都慕情/できごと/別れたあとで/望郷/女の意地/花のメルヘン/秋でもないのに/愛でくるんだ言訳/めまい/抱擁

CAL-5004 30cmステレオ ¥2,000

行動する
CANYON キャンيون・レコード

ヨーロッパへ最大の買
ヨーロッパが業顔を見せはじめるのは、これから。あの枯葉のバリ、華麗なオペラの開幕、そして壮大な白銀のアルプス。捨てがたい魅力です。それにもうひとつ、割安旅行の季節。12日間でなんと297,000円。ヨーロッパ旅行としては信じられないほどの安さです。もちろん、ジャルパックだから、内容は充実。列車旅行も楽しめるし、南欧も巡るし、ちょっと通なヨーロッパ旅行にしております。



秋から春のヨーロッパを訪ねるジャルパックJOY
JOYヨーロッパ12日間(11-4月発) 297,000円
JOYヨーロッパ15日間(11-12-2-4月発) 338,000円
JOYヨーロッパ18日間(11-12-3-4月発) 362,000円
JOYヨーロッパとアテネ18日間(12-3-4月発) 389,000円
JOYヨーロッパ22日間(11-2-4月発) 399,000円
JOYヨーロッパ・エコノミイ22日間(2-4月発) 349,000円

海外旅行の第一歩は資料の請求からクーホンを書き貼り、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、ご希望コース、出発予定日を記入のうえ、〒100-91東京中央郵便局私書箱205号 日本航空マイルボックスへ



11月からのヨーロッパは
297,000円のシーズンに入ります

Universal Orient Promotions presents